The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ダイクシス課程における「距離」とOrigoとの関係について
Author(s)	瀧田, 恵巳
Citation	言語文化研究. 2013, 39, p. 53-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24706
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ダイクシス過程における「距離」と Origo との関係について

瀧　田　恵　巳

Der Zusammenhang zwischen der „Entfernung“ im deiktischen Prozeß und der Origo

Emi TAKITA

Zusammenfassung: Diewald(1991) erklärt die Deixis mit dem Begriff „deiktischer Prozeß“, der aus den zeigenden Komponenten („reflexivem Bezug“ und „demonstrativem Bezug“) und den nennenden Komponenten („Entfernung“ und „Dimension“) besteht. Die „Entfernung“, als eine der nennenden Komponenten, steht in enger Beziehung zur Origo und hat zwei Untergruppen: die „origoinklusive Stufe“ und die „origoexklusive Stufe“. In diesem Beitrag wird der Zusammenhang zwischen der nennenden Komponente „Entfernung“ und der Origo dadurch erläutert, daß die Binarität der Entfernung auf die Anpassungsfähigkeit zu den Deiktika, bzw. im Deutschen *hier-da-dort* (3.1) und im Japanischen *ko-so-a* (3.2) geprüft, und dann Bühlers(1934/82) indogermanische Positionszeigarten (4.1) und die lokalen Verwendungen von *her*- und *hin*- (4.2) auf die Funktion der Origo untersucht werden.

キーワード：ダイクシス，距離，Origo

１．問題提起，目的，構成

指示詞の体系において，遠近は重要な役割を果たす。自分に近いところにあるものを話し手は「これ」と言って指し，遠くにあるものを「あれ」と言って指す。このとき「これ」と「あれ」は，話し手からの遠近によって区別される。Diewald（1991）[1] の提唱する「距離 Entfernung」は，こうした指示詞の遠近に関わる概念である。「距離」は話し手に帰属する定位の中心（「原点 Origo」）を基準とし，「Origo 含有段階」と「Origo 除外段階」という二つの下位分類に分けられる。この「距離」と下位分類には次のような問題がある。まず下位分類の二項対立は，しばしば日本語のコソアのように三項対立として記述される指示詞の体系に合致しない。こうした

1）　本論文の Diewald（1991）に関する説明の大部分は，既に瀧田（2005）で取り扱った内容を本論文の主旨に合わせ，適宜修正したものである。なお訳語については，reflexiver Bezug を「再帰的関与」，objektale Dimension を「客体次元」，modale Dimension を「法次元」に修正した。

三項対立に対し，「距離」の二項はどのように適用されるのだろうか。また Diewald（1991）の「距離」の下位分類は Origo を基準としている。しかし詳細に見ると，ダイクシスにおける「距離」は，本来 Origo とダイクシス対象との隔たりであり，その隔たりには Origo への方向とダイクシス対象への方向という二方向が存在する。「距離」を認識する際，これらの方向と Origo はどのように関連しあっているのだろうか。

本論文では，「距離」の二項対立を具体的に適用したうえで，「距離」の認識における Origo の機能を Origo への方向とダイクシス対象への方向という二方向との関連について分析することにより，ダイクシスにおける「距離」のメカニズムを解明することを目的とする。それには，まず Diewald（1991）の「距離」をめぐる主要概念，及び Origo を規定する必要がある。2 では理論的枠組みとして Diewald（1991）の「距離」に関わる各主要概念の説明（2.1）の後，本論文の Origo に対する見解を示すと共に Diewald（1991）による Origo の位置づけを行う（2.2）。3 では「距離」の二項対立の適用を取り扱う。まずドイツ語の hier-da-dort に関する Diewald（1991）の見解を紹介し（3.1），日本語のコソアへの適用を検討する（3.2）。4 では「距離」に関わる Origo への方向及びダイクシス対象への方向に類似するダイクシス現象，即ち Bühler の提唱する Hic-Deixis と Der-Deixis（4.1），及び her と hin の合成語の空間的用法（4.2）に基づいて，その Origo の機能を分析し，「距離」のメカニズムを考察する。5 では分析と考察の結果をまとめ，さらに今後の課題を提示する。

2. 理論的枠組み

2 では理論的枠組みとして，2.1 で「距離」に関連する主要概念「ダイクシス Deixis」，「原点 Origo」，「ダイクシス過程 deiktischer Prozeß」，「指示的構成要素 zeigende Komponente」（「指示的関与 demonstrativer Bezug」と「再帰的関与 reflexiver Bezug」），「命名的構成要素 nennende Komponente」（「次元 Dimension」と「距離 Entfernung」）を説明した上で，2.2 で「Origo」と「視点」及びその関係について，本論文の見解を示す。

2.1 Diewald（1991）の「距離」に関する主要概念

「ダイクシス Deixis」には様々な見解がある。渡辺（2009）によると，ダイクシス研究には，ダイクシス体系そのものを扱うもの以外に，特定の語彙や文法形式の説明原理としてダイクシスを扱うものがある。Diewald（1991）は，ダイクシス体系がテクストの分類に有効な手段であるというテーゼを出発点し，あらゆる言語表現について，それがダイクシス体系においてどのように位置づけられるかを検討する。従って Diewald（1991）のダイクシス理論は，概して体系の説明ではあるものの，語彙の説明原理でもある。Diewald（1991:1）は，ダイクシスを「言語により指し示すこと sprachliches Zeigen」と呼び，「言語外要素を話し手（「原点 Origo」）を

出発点にして位置づけることにより，指示すること」[2] と暫定的に定義する。この定義はさらに次のように詳述される。

Deixis ist somit die kontextabhängige Denotation außersprachlicher Elemente mittels bestimmter sprachlicher Ausdrücke: Der Sprecher bezieht sich durch Deiktika auf bestimmte Elemente des Äußerungskontextes, indem er sie relativ zu seinem Standpunkt lokalisiert.（Diewald 1991:13）

従ってダイクシスは，言語外要素を特定の言語表現によって，コンテクストに依存して指示すること（Denotation[3]）である。つまり話し手は指示詞を媒体に，自分の立場に相対的に位置づけることによって，発話コンテクストの特定の要素を指す。

このダイクシスの定義によると，Origo は話し手が自らを中心として指示を行う出発点であるが，さらに次のように，自己を環境の中心とする者の知覚に由来するものとみなされる。

Festzuhalten ist somit, daß die Origo durch den jeweiligen Sprecher, der durch die bloße Existenz einer Äußerung immer vorausgesetzt ist, realisiert und durch seine Raum-Zeit-Koordinaten im Kontext fixiert（„lokalisiert“）wird. Wichtig ist hier die Unterscheidung, daß die Raum-Zeit-Koordinaten zwar die Origo fixieren, daß sie aber nicht die Origo sind. Die Origo als zentraler Orientierungspunkt des sprechenden Ego ist ein abstrakter Begriff, der zwar den Nullpunkt für die deiktischen Dimensionen zur Verfügung stellt, aber doch mehr ist als die Summe dieser Nullpunkte. Er liegt ihnen zu Grunde, liegt „vor“ ihnen und entspringt der Selbstwahrnehmung des Ego als Zentrum der Umwelt.（Diewald1991:29-30）

従って，発話があれば必ず前提とされるその時々の話し手によって，Origo は実現され，その空間―時間－座標によりコンテクストに固定さ（「位置づけら」）れるということは固守されなくてはならない。ここで重要なのは，空間―時間―座標は確かに Origo を固定するが，座標は Origo ではないということである。話している自己を中心として定位づける点としての Origo は，抽象概念であり，それは確かにゼロ地点としてダイクシスの次元に参与することができるが，こうしたゼロ地点の総体以上のものである。この抽象概念はゼロ地点の根底にあり，ゼロ地点よりも以前から存在し，環境の中心としての自己による自らの知覚から生じる。

このように Diewald（1991）の Origo は単なる中心ではなく，中心にいる者の知覚に由来す

2） 該当する原文は次のとおりである。
Deixis, die vorläufig als „sprachliches Zeigen“ beschrieben sei, verweist auf außersprachliche Elemente, indem sie diese vom Sprecher（von der Origo）aus lokariliert.（Diewald 1991:1）

3） より厳密な定義では「指示する（こと）」にあたるドイツ語が（一般的な動詞である zeigen 及び verweisen ではなく），Denotation となるが，この語に関しては言語学，記号論等の領域で様々な解釈がある。Diewald（1991:45）は，Herbermann（1988:27f）と同じ立場をとり，Denotation は言語表現と Referenz とよばれる（ことの多い）言語外対象との関係であると理解する。さらに Diewald は Herbermann の見解を明確に規定し，「句 Phrase」，つまり文脈を形成できる表現のみが Denotation の機能を果たすとする。

る知覚の中心でもある。これは本論文の見解とは異なるが，詳細は 2.2 で説明する。

Diewald（1991）によるダイクシス，即ち「言語により指し示すこと」においては指示機能を持つことば（指示詞）が必須要素である。指示詞は，「指示対象 Denotat（Denotation「指示」の対象）」が何であるかを規定する意味的特徴を表す命名語と区別されるが，指示詞にも無数の指示対象に適用される意味的特徴がある。指示詞に共通の意味的特徴は，端的に言えば Origo と指示対象との関係に基づく意味素性である。その一方で指示詞は命名語と同様に指示対象の性質や属性などの意味素性も持つ。従って言語によって指し示すプロセス，即ち「ダイクシス過程 deiktischer Prozeß」は，「指示的構成要素 zeigende Komponente」と「命名的構成要素 nennende Komponente」という指示と命名の両方の要素から成り立つ。

ダイクシス過程を構成する指示的構成要素とは，コンテクストに結合する方向関係であり，「再帰的関与 reflexiver Bezug」（起点，Origo へ戻る結合）と「指示的関与 demonstrativer Bezug」（目標地点及び「ダイクシス対象」への指示）に分けられる。つまり，まず指示の起点（Origo）へ戻り，その位置を確定して初めて，ダイクシス対象が確定される。

ダイクシス過程の命名的要素は二つの意味論的軸から成る。一つはダイクシス対象の種類に基づく「次元 Dimension」で，「空間次元 lokale Dimension」，「時間次元 temporale Dimension」，「人称次元 personale Dimension」，「客体次元 objektale Dimension」，「法次元 modale Dimention」という下位範疇がある。もう一つが本論文の論点となる「距離 Entfernung」で，いわばダイクシス対象と Origo の隔たりであり，「Origo 含有段階 origoinklusive Stufe」と「Origo 除外段階 origoexklusive Stufe」の二段階に分けられる。

以上の概念を指示詞に適用すると，話し手が自分のいる領域を指して，Hier bin ich「私はここにいる」という場合，「ここ hier」は，コンテクストに結合した方向関係として Origo への関与［再帰的関与］と指示対象（「ここ」という場所）への関与［指示的関与］を有し，また空間［次元］で，Origo を含む位置［距離］であることを表す。このようにダイクシス過程の導入により，指示詞のダイクシス的特徴は，命名的特徴とともに構造的に記述される。

「距離」は，同じ命名的構成要素である「次元」がダイクシス対象の属性に由来し極めて命名的傾向が強いのに対し，Origo とダイクシス対象との関係を示すことから，ダイクシス的傾向が顕著である。また「距離」の下位分類「Origo 含有段階」と「Origo 除外段階」には，具体的には次のような語彙及び意味特徴が割り当てられている。

	Origo 含有段階	Origo 除外段階
空間次元	„hier“	„dort“
時間次元 [4]	„jetzt“（「現在」Gegenwart）	„nicht jetzt“（「非現在」Nichtgegenwart）
人称次元 [5]	„ich“	„du“
客体次元 [6]	„dieser“	„jener“
法次元 [7]	（「事実的」faktisch）	„wahrscheinlich“（「非事実的」nicht-faktisch）

この下位分類は，Origoを含有する範囲をどの程度厳密にとらえるかによって決定する。上記によると，二つの下位分類は連続的なものではなく，互いに遠近の隔てによって，明確に区別することができる。事実Diewald（1991:132）は，hierにより指示される場所が「Origoから近い，即ちOrigo含有的」とする。従って「Origo含有段階」はOrigoを含むと判断できる領域で相対的にOrigoから近いと判断できる領域，「Origo除外段階」はOrigoを含まないと判断できる領域で相対的にOrigoから遠いと判断できる領域である。

このようにダイクシス過程の「距離」は，Origoと緊密な関係にあるが，本論文のOrigoは，Diewald（1991）のそれとは異なる部分がある。これについて次の2.2で詳述する。

2.2　Origoを巡る見解と規定

2.1で示したように，Diewald（1991:29-30）の提示するOrigoは，話し手から抽出される知覚の中心である。またOrigoは変換可能であることも指摘される。つまり，話し手が代わればOrigoも変わり，その都度指示詞は別のものを指し示すことができる。コミュニケーションの相手はその時々の話し手に自分の座標体系を合わせる。しかしこれらのOrigoの諸特徴は，次のBühler（1934/82）の提示するOrigoの一部に過ぎない。

初めて指示理論にOrigoを導入したBühler（1934/82:102f.）は，言語の指示場を座標体系に見立て，その中心である「Origo原点」を主観的な定位の出発点とする。座標体系の中ではどの対話者も拘束されるが（ibid.102-103），その一方で話し手は相手の定位体系に合わせること，つまり自らのOrigoとその座標体系を相手に移し替えること（Übersetzen）もできる（ibid.103）。DiewaldによるOrigoには，聞き手が話し手の座標体系に合わせることは考慮されているが，逆に話し手が聞き手の座標体系に合わせる可能性は考慮されていない。

さらにBühler（1934/82）はOrigoの変換可能性に加え，Origoの移動性を指摘する。例えば話し手が乗り物に乗ると直ちに乗り物の動いている方向に従って定位する（ibid.131）場合，「視覚方向を定める座標の出発点であるOrigoが身体触知像の中で移動する」（ibid.129）。Origoの移動の際，「自己中心的egozentrisch定位から位置記憶的topomnestisch定位へと飛躍」（ibid.131）し，「直観像」及び「知覚像」との緊密な結合がゆるめられる（ibid.130）。移動する者は運動の方向として「前」を規定し定位づけるが，この定位が既にその瞬間の身体状態から解放されており，場合により虚構の行為へ移行する（ibid.136）。この現象をBühler（1934/82:131f.）は，

4）　詳細はDiewald (1991:179) を参照のこと。なおOrigo含有段階の具体例として，強指示詞のheuteや弱指示詞の現在形が，Origo除外段階には，強指示詞のmorgenやgestern，弱指示詞の過去形や未来形が挙げられる。(Diewald 1991:180f.)

5）　Diewald(1991:202)は，人称次元として会話の役割を果たすもの，つまり専ら一人称と二人称のみを扱い，いわゆる三人称は「非人称」として除外する。

6）　Diewald (1991:227f.) によると，表中のdieserおよびjenerには代名詞的に用いられる場合のみならず，名詞を規定する場合も含まれる。

7）　法次元の場合，Origo含有段階は原則として無標，Origo除外段階は有標となる。したがって後者に該当する語彙は，Kerndeiktikonとしては事実性に関わる話法詞全般(sicher, wahrscheinlich)等，弱指示詞としては接続法などがあるが，その一方Origo含有段階の言語表現として挙げられるのは，弱指示の直説法のみである。詳細はDiewald (1991:231f.) を参照のこと。

特に物語の場面などを指示場とする想定上のダイクシスにおいて登場人物の移動と共に場面が移行する「推移 Versetzung」という現象に依拠して説明する。

Origo の移動に関する Bühler（1934/82）の見解で重要な点は，Origo の移動の際に主体と知覚との緊密な結合がゆるめられること，そして話し手自身（Origo）の移動が現実世界でも起こるにも関わらず，想定上のダイクシスが持ち出され，かつ虚構の行為への移行が指摘されていることである。この二点は次のことを暗示している。即ち話し手は，自ら（Origo）の移動に対して，物語の場面の移り変わりを描写する語り手の役割を果たす。現実の話し手は知覚の中心であり，指示場の中心（Origo）と指示場を把握する観点（以降下線部の観点を「視点」と呼ぶ）は未分化の状態である。しかし物語などの想像の世界では，指示場は想像上の場面で，その中心（Origo）は，もとより場面に存在しない創造者の「視点」から容易に区別される。Origo から切り離された「視点」を持つ創造者は，その語る機能を担う「語り手」として，場面（指示場とその Origo）の移り変わりをいわば外の目から描写することができる。このように想定上の指示場と語り手により Origo と「視点」は明確に区別される。しかし現実の話し手も，実は自らの行動を描写することがある。それは日記などの過去の回想はもとより，リアルタイムの場でも起こる。元来人は現実の指示場において自分自身のありのままの姿や行為を知覚することはできない。自分自身の行動を描写することは，結局のところ想像に頼らざるを得ない。Bühler（1934/82）が Origo の移動，つまり話し手自身の移動を知覚から切り離し，想像上のダイクシスによって説明するのはそのためであろう。

「視点」が Origo と共にある場合，そこから知覚される状況が生き生きと描写されるが，Origo の移動のように「視点」が Origo から解放される場合，Origo を中心とする位置関係が描写される。この知覚情報と位置情報との相違は，Bühler（1934/82 :131）が指摘する「自己中心的 egozentrisch 定位」と「位置記憶的 topomnestisch 定位」の相違に由来する。

以上の Bühler（1934/82）に関する考察に基づき，本論文では，Origo を指示場の中心とし，状況を把握する起点である「視点」と区別し，次のように定義する。

［本論文での Origo の定義］

Origo は，言語の指示場の中心，且つ主観的定位の出発点で，話し手に由来する。Origo は変換・移動可能であり，指示場を把握する観点（「視点」）とは区別される。

Origo と「視点」の区別により，話し手と語り手は次のように説明することができる。現実の指示場にある話し手は通常 Origo と「視点」を併せ持ち，想像の力で「視点」を Origo から分化させるが，逆に想像上の世界を語る語り手は，通常場面（指示場）の外の「視点」から場面を描写するが，場面の中心（Origo）にも「視点」を置いて描写することもある。

本論文の定義に照合すると，Diewald（1991）の Origo は「知覚の中心」で，「視点」とは未

分化である。このOrigoの特徴が「距離」の重要な要因となるが，詳細は4.2及び5で論じる。

3. 指示詞の三項対立と距離の二項対立の対応関係

3では「距離」の二項対立が指示詞の三項対立に具体的にどのように適用されるかを検討することにより，「距離」の二項対立に関する具体的な言語現象を明らかにする。

3.1 ドイツ語のhier-da-dort

Diewald（1991:133f.）によると，三項対立モデルの最大の問題点は，ダイクシス過程における方向づけられた関係にある二点，即ちOrigoとダイクシス対象との関係では決定されない，別の「測量のための点Maßpunkt」を導入せざるを得ないことにある。確かに例(1)では，hier-da-dortの間には話し手からの段階的な遠近が想定され，daは話し手から中程度離れた領域を指す。しかし，例(2a)と(3a)のdaはhierやdortと対立し，それぞれdort(2b)とhier(3b)に置き換えられる（ibid.156)。つまりdaそのものを距離の点でhierやdortと区別し，規定することは非常に困難である。daの距離を規定する困難さは随所で指摘されている。Klein（1978:31）はdaとdortが区別しがたいと指摘する。また例(4)のdaについては個人差も認められる。Ehrich(1982:54)は話し手がSchrankの中にいる場合には成立しないと判断するが，Diewald(1991:157)によると，話し手とMausがSchrankの中にいても問題なく，daはhierと言い換えられる。

(1) Hier sitzt du, da Tante Anna und dort die Oma.（Diewald1991:157）
(2a) Hier muß das Messer liegen und da die Gabel.（Diewald1991:156）
(2b) Hier muß das Messer liegen und dort die Gabel.（Diewald1991:156）
(3a) Da sitze ich immer zum Lesen und dort zum Schreiben.（Diewald1991:156）
(3b) Hier sitze ich immer zum Lesen und dort zum Schreiben.（Diewald1991:156）
(4) Da ist eine Maus im Schrank.（Ehrich 1982:54）（Diewald1991:156）

また単独で用いられる場合，hierとdortは，例(5)と(6)のように話し手からの距離を表すのに対して，例(6)のdaによりある存在や場所，状況を指示されるものの，話し手からの遠近は確定できない。Diewald（1991:156）によると，daが単独で用いられる文では，daのダイクシス対象が端的に距離について中立であるという判定はできず，そもそも距離に関する陳述はできない。daの用法の唯一の前提は「現に現れているものの存在」で，その存在の具体的な形態は空間における物理的な存在であり，daの唯一の機能は，コンテクストに現に存在しているものへ注意を集中させることである（ibid.155)。

(5) Hier steht ja der Schirm.（Diewald1991:156）
(6) Dort steht ja der Schirm.（Diewald1991:156）
(7) Da steht ja der Schirm.（Diewald1991:156）

また Ehrich（1983:198f.）によると，da は真に空間的な照応に用いられ，さらに空間のみならず，時間，理由等についても照応的な用法がある。例(8)の da は dort で言い換えられ，ダイクシスも関与する可能性もあるが，例(9)の da は他の副詞では言い換えられないが故に完全に照応が関与していると見なされる。

(8) Mein Vater ist dann 1918 ins Ruhrgebiet gegangen, weil da（dort）Verdiestmöglichkeiten besser waren.（Ehrich 1983:202）
(9) R: Von der Stechbahn zum Bahnhof, das schaffen Sie doch in zehn Minuten!
A: Da müssen Sie rennen, Herr Richter, da müssen Sie rennen.（Ehrich 1983:203）

以上のことから，Diewald（1991:157-158）は，距離の下位分類に組み入れられるのは hier と dort のみとし，Origo 含有段階には hier を，Origo 除外段階には dort を割り当てる。一方 da に関しては，対立がない限り，距離の点で hier や dort と区別することはできない。さらに空間以外の多様な照応にも用いられることから，Diewald（1991:158）は，da を命名的構成要素「次元」と「距離」に対して中立的な「原指示詞 Archideiktikon」と呼ぶ。

3.2 日本語のコソア

一般に，日本語のコソアドのうちドは不定称であることから除外され，コソアのみが指示詞と見なされる。柴田（1980:20f.）によると，伝統的なコソアの意味記述は話し手から見た距離の違いによるもので，話し手と聞き手が同じ立場をとる例(10)，(11)，(12)によく適応する。

コ：「近称」：話し手を中心に最も近いところ
ソ：「中称」：話し手を中心に少し離れたところ
ア：「遠称」：話し手を中心に最も離れたところ
(10)（八百屋で A からも B からも近いものを指して）
A：「これをください。」
B：「はい，これですね。」（金水・木村・田窪 1989:5）[8)]
(11)（A からも B からも少し離れたベンチを指して）
A：「そこにすわりましょう。」（金水・木村・田窪 1989:16）

8) 例(10)~(12)は金水・木村・田窪(1989)より引用。ただし括弧内の脚色は本論文著者による。

(12)（AからもBからも遠くにあるものを指して）

A：「あれは，なんですか。」

B：「あれはパソコンです。」（金水・木村・田窪 1989:5）

一方，この伝統的な分類は，次の話し手と聞き手が対立する場合，特にソの用法には適合しない。例(13)では，話し手は自分に近い位置をコで指すが，(14)では話し手は聞き手の位置を遠く離れているにもかかわらず，ソで指すことができる。

(13)（席を探している人に）こっちへいらっしゃい。わたしの隣の席があいていますよ。[9)]

(14)（遠く離れている人に向かって）あなた，そこを動かないでください。

佐久間（1983:19f.）[10)] によると，伝統的な近称・中称・遠称の区別は単に話し手からの遠近によって決まるのではなく，自称・対称・他称という対話の場における対立関係に基づく。佐久間はヨーロッパ言語の語法から借用した「人称」から着想を得るが，最終的には「はなしの場をかえりみる」という立場から指示詞の用法をとらえる。佐久間（1983:34-35）によると,「話し手とその相手との相対して立つところに，現実のはなしの場ができ」,「その場は，まず話し手と相手との両極によって分節して，いわば『なわばり』ができ」る。そして「これ」は話し手の勢力範囲である「わのなわばり」に,「それ」は相手の勢力範囲である「なのなわばり」に属する。「あれ」はそれ以外の範囲に属するものを指して言う。

しかし，伝統的な説と佐久間の説をもってしても，ソのすべての用法が説明できるわけではない。さらにソの用法で典型的なものとして，先行する文脈を指す照応がある。照応はダイクシスとしばしば区別されるが，少なくとも距離の体系に位置づけ，話者からの遠近を規定することは難しい。例(15)の「其（その）」は，話し手が自分の発言内容の一部を指示するもので，陳述する一連の文脈の先行内容をダイクシス対象とする。客観的状況からいうと，この場合ダイクシス対象は話し手の知識に属するが，通常話し手はこれをコではなく，ソで指示する。阪田（1991:62）はこの例について,「両者（＝話し手と聞き手）は互いに対立する場を構成するのではなく，両者が一体となって一つの領域を作る」とコメントする。確かに,「其男」というダイクシス対象に対して，聞き手も通常ソを用いて「その男はどうしてそんなに笑ったんだ」と同一指示物をソ系で指示することから，この話し手の発言を指示するソの用法について，話し手と聞き手は同じ立場をとると考えられる。

(15)「昔ギリシアにクリシツパスと云う哲学者があったが，君は知るまい。」

9）　例(13)と(14)は，阪田(1971:127)より引用。ただし括弧内の脚色は本論文著者による。
10）　佐久間(1983:15)は，英語のhereとthereと同様にドイツ語のhierとdortが対立すると説明している。

「知らない。それがどうしたのさ。」

「其男が笑ひ過ぎて死んだんだ。」　（夏目漱石『我が輩は猫である』）[11)]

ソの照応は，話し手自身が陳述する一連の文脈の先行内容を指すのに多用され[12)]，また「それゆえ，そのため，それなのに，それに」などのように先行内容を受ける接続詞が多く語彙として定着していることからも，ソの典型的用法の一つと見なされる。

以上のコソアの用法と説明を概観すると，コとアのみの対立ならば，話し手からの遠近によって明確に区別することができる。しかしソの用法は，端的に話し手からの距離だけで説明することはできない。伝統的な説では，ソのダイクシス対象は，話し手から少し離れた領域に属するが，これは結局 da の場合と同様，コとアとの区別があいまいであるか，コとアのダイクシス対象が属する領域以外の位置という二次的な規定となる。さらに佐久間（1983）で明らかなように，聞き手が話し手と対立する立場をとるソの用法を説明するためには，端的に話し手からの距離だけではなく，聞き手の領域という別の要素を導入せざるを得ない。この聞き手の領域はダイクシス過程の距離に関して弁別的な要素とはなりえない。なぜなら例(10)，(11)，(12)のように，聞き手はしばしば話し手と同じ立場をとるからである。また(15)のような照応は，いわば Origo からの距離や空間や時間といった次元を超えている。

また少し別の観点から，コとアを対立させ，ソを除外する学説もある。金水（2001:60）は，「いわゆる直示（眼前指示，現場指示）のコ，ソ，アは，同じ空間上に対立的にイメージされてきた」のに対し，「コ・アの『直示』は典型的な直示である」が，ソには必ずしも当てはまらないことを主張する。その根拠は次の通りである。指示詞の現場指示用法を仮に「話し手（及び聞き手）を含む発話の現場に存在する対象を，指差し等によって直接的に指し示しながら用いる用法」（金水 2001:160）とすれば，コとアの現場指示用法には，必ず「話し手は指示している時点で指示対象の場所が分かっている」という「所在既知性」（ibid.161）が成立する。それゆえ，実際に手元にある現物，及び遠く離れたところにある現物を指して，「{この / あの} 本は今どこにあるの？」（ibid.161）と聞くのは，至極奇妙な質問となる。「この / あの」を使う前提として，話し手はすでに指示対象の場所を知っているからである。一方ソについては，例えば電話での会話で相手の位置を知らない場合，つまり所在既知性が無い場合であっても，「そこ，どこ？」（ibid.162）とごく自然に問うことができる。このようにソがコとアから除外される根拠は，ソの所在既知性の欠如である。しかしこの現象もまた「距離」によって説明することができる。つまり現場指示のコとアは，話し手（Origo）からの距離を表すことを前提とするために，

11） 阪田(1971:132)より引用。原典では国名「ギリシア」が漢字で「希臘」と表記され著者名とタイトルの順は逆である。

12） 一般的な前方照応にソ系が用いられるという見解はすでに三上(1970/92)にある。また堀口和吉(1978/92)は，文脈指示にソが多用されることを認めつつも(ibid.87)，文脈において「対象とする事柄・事物が，自己に関わり強い身近なものである」場合にはコが用いられ，「対象とする事柄・事物が，自己に関わり強い遙かなものである」場合にはアが用いられると指摘する(ibid.84)。堀口(1978/92)の指摘するコとアの対立は話し手との緊密性と距離を反映しており本論文の主張にも合致する。

話し手は自分とダイクシス対象との位置関係を予め知っておく必要があるが，聞き手の領域に結合するソの用法は，Origoとダイクシス対象間の距離を表すことを前提としていないために，話し手はダイクシス対象の位置を予め知っておく必要がないのである。

以上のように，日本語のコソアに関して，距離のOrigo含有段階とOrigo除外段階にはあてはまるのはコとアであり[13]，ソの用法に関しては，コとアの中間という二次的な位置づけとして説明されるか，聞き手の領域等のOrigoとは別の要素により記述する必要がある。

3.3　二項対立の適用により解明される三項対立の共通点と問題提起

hier-dort-dort及びコソアの三項対立において，「距離」の二項対立に対応するのはhier-dort及びコとアであり，二項対立から逸脱するdaとソに関しては，Origoからの距離とは別の次の二つの共通点がある。一つは対立する二項の中間領域に属するものを指すことであり，もう一つは頻繁に照応に用いられるということである。なお両者の相違点は，ソが「聞き手の領域」の領域に属するダイクシス対象を指すのに対し，daの用法については聞き手の領域の役割はさほど明瞭ではない[14]という点である。

このように「距離」においては遠近により二項（hierとdort及びコとア）が対立する。それ以外の要素（da及びソ）との違いは，前者が単独であっても話し手からの遠近を表すのに対し，後者が間接的にしか遠近を表さず，且つ遠近以外の要素が介入することにある。

4.「距離」における方向とOrigoとの関係

3では，Origoからの距離の遠近により二項が対立することが明らかになった。しかし対立する二項を区別する遠近は，どのように認識されるのだろうか。4では，「距離」に関する方向，即ちOrigoへの方向とダイクシス対象への方向に類似するダイクシス現象の検証により，「距離」におけるOrigoの機能と「距離」のメカニズムを分析・考察する。

4.1　Bühler（1934/82）による四つの指示様式と「距離」

「距離」に関する「Origoへの方向」と「ダイクシス対象への方向」に類するものとして，

13）本論文では，Origo含有段階とOrigo除外段階をDiewald(1991)と同様に，Origoからの遠近でとらえた結果，近い領域であるOrigo含有段階をコ，遠い領域であるOrigo除外段階をアとする結論に至った。しかし渡辺（2009:170）のように，Origo除外段階を厳密にOrigoを除く「原点非内包ダイクシス」ととらえるのであれば，近くでも自分の位置以外を指差すコの用法はOrigo排除段階とみなされる。

14）4.1で述べるように，Bühler(1934/82:90)は，聞き手の位置を端的にdaで表現することはできず，敢えて表現するならばda bei dirであると指摘する。またBühler(1934/82:100)によると，患者が医者に体の痛いところを指すとき，手の届くところはdaと言い，手の届かないところはdortと言って指す。日本語では前者は「ここ」，後者は「そこ」に相当する。この場合daが指す領域は，日本語「ここ」の話者の領域と見なされるところにまで及び，日本語「そこ」の聞き手の領域には結びつかない。一方Diewald(1991:159)によると，通常自分の体の二か所を対比させて指示する場合，通常近い所はhier，遠い方はdaで指し，dortは非常に遠くにあると感じられることを効果的に描写する場合に敢えて用いられる。

Bühler（1934/82:83）の提示するインドゲルマン語の四つの位置指示様式が挙げられる。この四つの位置指示様式はもともと Brugmann の分類に基づくが，Bühler（1934/82）は適宜修正を加え，また指示の補助手段であるしぐさや感覚データーが発話をとりまく状況に基づいて談話を理解させる（ibid.84）という観点を導入して，分析する。

1 Der-Deixie[15)]「それ―ダイクシス」: 指さすしぐさと共に対象を指示する
2 Hic-Deixis「ここ―ダイクシス」: 話し手の位置を指示する
3 Istic-Deixis「そこ―ダイクシス」: 聞き手の位置を指示する
4 Jener-Deixis「あれ―ダイクシス」: 境界の向こうにある遠くの対象を指示する

Der-Deixie は指差すしぐさを伴う指示で，Bühler（1934/82:87f.）は，例として知覚領域にある何かを実際に指で指しながら「dér Hut その帽子」という音声を発する事例を挙げる。Brugmann が挙げる典型例は「dér ist es gewesen それだったのか」（ibid.88）であるのに対し，Bühler（1934/82 :88-89）は，指示代名詞としての dér が本来名詞の文法的性を受けるという文法機能も有することから，敢えて名詞を伴う例を典型例とする。

二番目の Hic-Deixis は話し手の位置への指示，三番目の Istic-Deixis は聞き手の位置への指示であり，Brugmann の分類ではそれぞれ Ich-Deixis と Du-Deixis であった（ibid.83）。しかしこれらの Deixis は ich 及び du 自身ではなくその位置を指すことから，Bühler はラテン語の位置を表す語 hic と istic に変更する。なおドイツ語で表現されていないのは，話し手の位置を表すドイツ語としては hier があるが，聞き手の位置を表すには適当な語が無いからである。聞き手の位置は敢えて言えば da bei dir で，端的に da では表現できない（ibid.90）。

話し手は無論自分の位置を指差すことはできるが，Hic-Deixis の本質は，指し示すしぐさではなく，話し手が「Hier ここ」という自分の音声などの感覚データーで自分の位置を相手に知らせる信号機能に由来する。それは，話し手の位置の確定は，指差すしぐさはなくとも，感覚データーによって自らの位置を知らせる信号のみで成立するからである。

Istic-Deixis には独自の指示補助手段はない。話しかける相手を指差すしぐさは Der-Deixis の指のしぐさに酷似しており，Istic-Deixis 特有のものではない。音響的には，相手を名指すことや pst, he などの呼びかけといった多様な手段がある（ibid.99）が，これらは感覚データーとしては複雑で，Hic-Deixis に見られる音声データーのような明快さに欠けている。Bühler（1934/82:99）は，Istic-Deixis が四つの指示様式のうち特に劣勢である原因として，こうした聴覚データーが複雑であること，視覚的なしぐさの点で Der-Deixie に酷似していることを挙げる。

四番目の Jener-Deixis は，指示を行う者から見て遠くにある対象を指すか，何らかの境界を

15） Der-Deixis について Bühler(1934/82:83f.) は，Der-Deixis と Dér-Deixis の二通り（小文字で書きはじめる例を加えると四通り）で記述している。この Der は本来指示的機能を持つため Dér の方が適切であるが，本論文では記述上の利便性から Der-Deixis と記述する。

隔てた向こう側にある対象を指す指示である。Jener-Deixis においては，Der-Deixis との相違点と共通点が入り乱れて存在する。まず Jener-Deixis には，指のしぐさのように恒常的で特別なしぐさはなく（ibid.100），直接目の前には無いが，精神分析上の複合概念のように，意識の際に潜んでいるものをも指示する（ibid.101）。一方日常語の jener は dér と同様に名詞の文法的性を受ける（ibid.89）。

これら四つの指示様式を指示の補助手段について概観すると，最も明確に対立しているのは指差すしぐさを伴う Der-Deixis と自らの位置を知らせる信号機能により成立する Hic-Deixis である。Istic-Deixis と Jener-Deixis は，しぐさを伴うことができるという点で Der-Deixis に従属する。Hic-Deixis もまた，話し手が自分の位置を指差すことができることから Der-Deixis の下位に位置づけられる。Bühler が Der-Deixis をダイクシスの典型としたのは，他のすべてのダイクシスに指差す動作があてはまるからである。しかし一方，Hic-Deixis における信号機能による話し手の位置の確定は，ダイクシス全般において不可欠な要素である。なぜなら話し手の位置を確定することなしに主観的定位によるダイクシスは成立しえないからである。そして Der-Deixis にも話し手の位置を確定する要素が含まれている。つまり指差すしぐさを伴う Der-Deixis に対して，対話者及び受信者は，まずその視覚情報や音響情報を信号として話し手の位置を確定したうえで，その後指差すしぐさを通じてダイクシス対象を確定する。Der-Deixis と Hic-Deixis の対立は同レベルの対立ではなく，いわば指差すしぐさという外的な共通点と Origo への関与という内在的な共通点の対立である。

Der-Deixis と Hic-Deixis を「距離」の観点から見ると，Der-Deixis の指差すしぐさは，どんな距離にあるダイクシス対象にも等しく適用されることから，距離は考慮されないといえる。Bühler（1934/82:97）もまた，指差すしぐさに指示される対象の遠近は考慮されないとする Brugmann の説をそのまま説明として引用する。それに対して，Hic-Deixis の本質は，指差すしぐさではなく，感覚データーにより自分の位置を知らせる信号機能に由来し，その主目的は，話し手の位置へ注意を促すことにある。この状況において距離の下位分類である話し手の位置（Origo 含有段階）は強調された形で示され，離れた位置にいる相手（Origo 除外段階）と明確な距離のコントラストをなす。さらに相手が信号を受信できるか否かもまた、大いに距離に依存する。

このように，Der-Deixis を指差すしぐさ，Hic-Deixis を自分の位置を知らせる信号ととらえることにより，Der-Deixis には距離は結びつかず，Hic-Deixis は Origo を強調するが故に，距離と強いつながりがあることを説明することができる。

4.2　her- と hin- の空間的用法における Origo の機能

4.1 では，四つの指示様式のうち，話し手の位置を知らせる信号機能を有する Hic-Deixis において「距離」の遠近は明確にとらえられることを提言した。この Hic-Deixis の信号機能は他

のすべてのダイクシスに内在している。この観点からいえば，Hic-Deixis は Diewald（1991）の提唱するダイクシス過程の指示的構成要素である Origo への関与（「再帰的関与」）の具現であるといえる。さらにこの Origo への関与を具体的に意味として表す語としてドイツ語には her が存在する。Bühler（1934/82 :92）は Hic-Deixis を Her による誘導であるとし[16]，Dér-Deixis を Hin による誘導と呼びかけと見なす。ここでは具体的な言語現象として her と hin の合成語の空間的用法を分析する瀧田（2009）をもとに，特に her の合成語が表す方向と Origo の関係に焦点を当て，hin のそれと比較することにより，「距離」のメカニズムと「距離」における Origo の機能を分析・考察する。

瀧田（2009）では，her と hin が対立し且つ共通の方向を表す語彙を対象に，その空間的方向が物語という想像上の場面の中心（Origo）に対してどのような位置関係にあるかを調査し，その際の Origo の特徴を分析する。具体的な語彙のペアは，下への方向を表す herab-hinab, herunter-hinunter, 上への方向を表す herauf-hinauf, 越える方向を表す herüber-hinüber, 内なる領域から外への方向を表す heraus-hinaus, ある領域内への方向を表す herein-hinein（以下便宜上これらの語彙の内 her を含む語彙を her-，hin を含む語彙を hin- と呼ぶ）で，用例は Michael Ende の二つの文芸作品（略号：M, UG）[17] 内の会話文を除く部分から引用する。

物語という想像上の場面では，しばしば登場人物の立場から場面が描写され，また登場人物の移動に伴って場面が変化する。その場合登場人物が場面の中心（Origo）を担うと考えられる。瀧田（2009:77）は，Bühler（1934/82）による想定上のダイクシスの三つの主要事例を基本に，宮崎・上野（1985）と西郷（1975）の視点論を取り入れ，Origo が移動するか否か，Origo が視点を持つか否かという二つの観点から用例を次の四つのタイプに分類する。

a. Origo は移動，視点有り：Origo は移動し，そこから場面を見る。（例 16）

b. Origo は移動，視点無し：Origo は移動し，外側から見られる。（例 17）

c. Origo は静止，視点有り：Origo は静止し，そこから場面を見る。（例 18,19,20）

d. Origo は静止，視点無し：Origo は静止し，外側から見られる。（例 21）

（16）Das Amulett war glücklicherweise mit der Kette an einem Korallenast hängen geblieben, der aus der Wand einer Felsenschlucht *heraus*ragte – sonst wäre das Kleinod in eine bodenlose Tiefe hinabgesunken.（UG:152）

幸いなことに，おまもりの鎖が岩の裂け目から突きでた珊瑚に枝にひっかかっていたの

16） Bühler(1934/82:92) は，her を，Hic-Deixis の信号機能ではなく，指差すしぐさ（自分自身を指差す行為）の方に関連づけるが，実際の辞書等の用例で her が話し手への方向を表す場合は，話し手が自分（の領域）を指差す例は見られないのに対し，Hört bitte einen Augenblick her!「ちょっとこちらに耳を傾けてください！」のように相手に話し手の位置を知らせる例は多数見られることから，本論文では her を Hic-Deixis と同様信号機能に関連するものと見なす。

17） 文献の詳細は本論文末の引用文献略号を参照のこと。

18） 4.2の各例文末には引用文献の略号とその引用箇所のページ数を括弧付けで記載した。またその日本語訳は，原則として引用文献リストに記載した訳本から引用し，原文と一致しない箇所については適宜修正を加えた。各日本語訳の末尾の数字は引用箇所のページ数である。

だった。－さもなければ，おまもりは底知れぬ深みへ沈んでしまっていただろう。（214）[18)]

（17）Dann schlich er die Treppe *hinunter* in den ersten Stock.（UG:79）
それからそうっと階段を降りて二階へいった。（111）

（18）Die Klotür ging auf, glücklicherweise gerade so, daß sie Bastian versteckte. Der Hausmeister der Schule kam *herein*.（UG:80）
トイレのドアが開いた。その開いたドアが，幸運にもちょうどバスチアンをかくした。用務員が入ってきた。（111-112）

（19）Vor sich hinmurmelnd ging sie zu dem Glücksdrachen *hinüber*, der noch immer reglos schlief.（UG:93）
ばあさんはぶつぶつ一人言をいいながら，今もまだ身動きもせずにねむっている幸いの竜の方へいった。（129）

（20）Die Kleidung, die die Yskálnari trugen, war also zugleich eine Art Schwimmweste, für den Fall, daß jemand in den Nebel *hinein*geriet.（UG:374）
イスカールナリが来ている衣服は，もし霧の海に落ちた場合，そのまま救命胴衣の役もはたした。（514）

（21）Er öffnete die Tür des Schlafgemaches und blickte in die große Höhle *hinaus*.（UG:217）
バスチアンは寝室の扉を開け，大きな洞穴をのぞいてみた。（303）

Origoが移動するか（タイプa及びタイプb）Origoが静止しているか（タイプc及びタイプd）の判断は，場面変化の有無によって決まる。この判断には，場面が必ずOrigoを伴うという前提がある。場面の移動は多くの場合，主たる登場人物の移動に依存する。つまり登場人物が移動すれば場面も変わり（例16,17），登場人物がその場にとどまっていれば場面も静止している（例18,19, 21）。このときOrigoはその登場人物が担うと判断する。

Origoに視点が有るか（タイプa及びタイプc）視点が無いか（タイプb及びタイプd）の判断は，場面の移動に関わるために場面の中心（Origo）を担うと判断される登場人物が描写されるか否かによって決まる[19)]。Origoを担う登場人物は確かにその場面にいるのだが，当該文中にそ

19）Origoの視点の有無に関連する研究として西郷(1925)とLangacker(1985)がある。
西郷(1975 :21)は文芸論の立場から，文学作品中の描写を，視点を担うことのできる登場人物（「視点人物」）に依拠して，２つの視点（「内の目」と「外の目」）を提示する。西郷(1975 :21)によると，「内の目」とはその場面を「ある（登場）人物の目を借りてその人物の内側から」描写する視点であり，「外の目」とはその作品に登場しない立場から描写する視点である。「内の目」をとりうる登場人物は，特に「視点人物」と呼ばれ，物語の筋や場面は概して「視点人物」の「内の目」か「外の目」から描写される。タイプaとcのOrigoに有る視点は「内の目」，タイプbとdのOrigoに無い視点が「外の目」はである。
Langacker(1985:126-127)は，言語表現による話者の明示と主観性に関して，以下の3つの例文を挙げる。これらの例によると，話し手を表す表現（a,bの下線部）の主観性はa<b<cの順に強くなり，明示しないcが最も主観的である。本論文において，視点のあるOrigoが関わる表現は以下のcに，視点の無いOrigoは以下のa,bの下線部に相当する。
a.　<u>The person uttering this sentence</u> doesn't really know.
b.　<u>I</u> don't really know.
c.　Don't really know. (126)

の人物が描写されることなく，その人物が知覚したであろう情景のみが描写される場合（例16,18,19）は，Origo に視点が有ると判断する。また Origo を担う登場人物がまだ出現していない場面や Origo を担う登場人物に関わりのない一般的な場面の描写（例 20）も，語り手は場面の中心の視点から描写していると判断し，Origo に視点が有るとみなす。それに対し，Origo を担う登場人物が描写される場合（例 17,21），Origo は外の視点から観察されているため，Origo に視点が無いと判断する。

タイプ a の用例では，Origo となる登場人物の移動に伴い，場面も移動し，移動中の登場人物の視点から場面が描写される。例（16）の heraus は，海中の岩壁の隙間から珊瑚の枝が突き出ている方向を表す。これは Amulett を探し求めてそこへ向かう登場人物から見た情景であるため，Origo は移動し視点があると判断することができる。また heraus の表す方向は視点人物の視界に入る方向であることから，Origo への方向と見なすことができる。

タイプ b ではタイプ a と同様に Origo となる登場人物の移動に伴い，場面も移動するが，視点は外側からその登場人物を描写する。例（17）の hinunter は登場人物 Bastian の移動方向を表し，物語の場面も共に移動する。タイプ b に分類される用例は，外から観察される Origo 自体の移動方向を表すため，Origo への方向，及び Origo から離れる方向は示さない。

タイプ c では，Origo と場面は静止しており，場面は Origo の視点から描写される。このとき Origo を担うのは典型的には登場人物で，その視点から描写されるが，まだ人物が登場していない際の情景描写など，登場人物の視点をとらない場合もある。例（18）の herein は Hausmeister「用務員」の移動方向を表すが，これはそれまで場面の中心であった登場人物 Bastian により観察される。このとき Bastian は静止しており視点を持つことから，この例文はタイプ c となる。例（19）の hinüber は，それまで場面と共に移動していた登場人物から離れていく sie の移動方向を表す。この時場面は静止しており，sie の移動はその場面の Origo を担う登場人物の視点から描写されたものと判断できる。例（20）は，場面の中心となる登場人物が聞いた伝説の内容で，その登場人物とは直接関わりのない場面の出来事が一般的な視点から描写されている。

タイプ d では，タイプ c と同様，Origo と共に場面も静止しているが，タイプ b と同様，Origo を担うのは登場人物で，外の視点から描写される。タイプ d には Origo を担う登場人物が体の一部を動かすことを表す例が多く分類される。例（21）の hinaus は Origo を担う登場人物 Bastian が視線を向ける方向を表すが，このとき Bastian は静止しており，描写の対象となるため，タイプ d に分類される。

収集された her- の空間的用法の全 76 例と hin- の全 269 例のタイプ別の用例数と割合，her- と hin- が示す方向と Origo との関係は次のとおりである[20]。

her-

20） 以下の分析結果は，瀧田(2009:89-90)を本論文に合わせ，適宜修正したものである。

① her- の全 76 例の内訳は，タイプ a が 1 例（1.3％），タイプ b が 6 例（7.9%），タイプ c が 57 例（75.0%），タイプ d が 12 例（15.8%）であり，タイプ c が全体の大部分を占める。

② Origo への方向を表す用例は計 57（a:1+c:45+d:11）で全体数 76 の 75.0%，Origo への方向を表さない用例は計 19（b:6+c:12+d:1）で全体の 25.0% である。

③ 全体を通して，Origo への方向とは見なされない方向に適用される語彙は，下への方向を表す herab, herunter と内なる領域から外への方向を表す heraus に限られる。さらに Origo への方向を示さない下への方向を表す herab, herunter は，タイプ c においては引力に従って垂れ下がっているものの状態を表す。

④ 移動表現としては非典型的な範囲占有経路表現（領域の広がり等の表現）は Origo への方向を示さない herab, herunter に現れるが，それ以外には見られない。

hin-

① hin- の全 269 例の内訳は，タイプ a が 6 例（2.2%），タイプ b が 121 例（45.0%），タイプ c が 52 例（19.3%），タイプ d が 90 例（33.5%）であり，タイプ b とタイプ d が全体の大部分を占める。

② Origo から離れる方向を表す用例は計 133（a:3+c:49+d:81）で全体数 269 の 49.4%，Origo から離れる方向を表さない用例は計 136（a:3+b:121+c:3+d:9）で全体の 50.6% である。

③ Origo から離れる方向を表さない用例は概してタイプ b に属する。タイプ a，c，d に分類される用例は，その多くが Origo から離れる方向と見なされる。Origo から離れる方向を表すか否かを区別する語彙的特徴は特に無い。

④ Origo から離れる方向を表す用例の移動内容については，次の特徴がある。タイプ a と c は移動表現としては非典型的な範囲占有経路表現が高い割合を占め，タイプ d は体の一部を動かす動作，特に視点の向きを表す用例が高い割合を占める。

her- については，タイプ c の割合が 75% と非常に高く（her- ①），また Origo への方向を表す割合も 75% で非常に高い（her- ②）。Origo への方向を表すタイプ c は 45 例（her- ②）で全体の 59.2% を占め，her- は全体の半分以上が，視点を持つ静止した Origo へ向けて移動する方向を表す。her- の示す方向の目標側に位置する Origo を担う登場人物が視点を持つのであれば，その登場人物は接近する移動物の遠近を明確に認識することができる。タイプ c と同様タイプ a の Origo も視点を有することから，her- が表す Origo への方向において Origo が視点を有する割合は，タイプ c とタイプ a の計 46 例で，Origo への方向を表す全 57 例の 80.7%（全体の 60.5%）を占める。逆に Origo への方向を示さない例は，語彙が限定され，対象の広がりや範囲を表す用例が多く，典型的な移動方向とはいえない（her- ③④）。

それに対して hin- が Origo から離れる方向を表す割合は，全体の 49.4%（hin- ②）で her- に比べてかなり下回る。また Origo から離れる方向と見なされない例には，her- に見られるよう

な特に語彙・意味的な制限は特に無く，典型的な移動を表す用法も多く見られる（hin- ③）。むしろ Origo から離れる方向を表す方が，語彙や意味は制限される（hin- ④）。以上の点で hin- は既に her- と大きく異なるが，さらに Origo から離れる方向を表す用例の内訳は，Origo の視点の有無の点において，her- とは全く異なる傾向を示す。

hin- が Origo から離れる方向を表し，且つ Origo に視点が有ると判断できる用例数は，52 例（a:3+c:49）（hin ②）で，Origo から離れる方向を表す全 133 例の 39.1%（全体の 19.3%）である。これは her- の 80.7%（全体の 60.5%）に比べると非常に少ない。しかもこうした例では，Origo からの離脱より目標に重点がある傾向が強い。例(21)の hinüber は視点を担う登場人物からみた sie の移動を表し，sie は登場人物のもとを離れるが，重点はむしろ移動目標である Glücksdrachen の方に置かれる。また hin- が表す Origo から離れる方向において，Origo に視点が無いタイプ d が 81 例で 60.9%（全体の 30.1%）で比較的高い割合を示す。タイプ d の用例の多くは，Origo を担う人物が自分の体の一部を動かす，視線を向けるという身体動作を表すが，この動作においては，起点である Origo と移動物（身体部分）の結合が非常に強く，離脱の意味は希薄である。

以上のように，her- は Origo への方向を表す場合，Origo に視点が置かれる傾向が強い（全体の 60.5%）のに対し，hin- は Origo から離れる方向を表す場合，Origo に視点が置かれる傾向は弱い（全体の 19.3%）。

さらに瀧田（2010）による別の文学作品 Hermann Hesse の Steppenwolf を用いた同じ調査において，この視点が置かれる Origo についての her- の傾向と hin- の傾向はより顕著に現れる。her- の示す方向が Origo への方向と見なされる用例数は，タイプ c に 23 例，タイプ d に 4 例見られ，合計 27 例で，her- の全体数 32 の 84.4% と非常に高い割合を占め，そのうち Origo が視点を持つ 23 例の割合は 85.2%（全体の 71.9%）である。一方 hin- の Origo から離れる方向を表す用例はタイプ c に 6 例，タイプ d に 10 例で合計 16 例，全体数 46 のうちの 34.8% であり，さらにそのうち Origo が視点を持つ 6 例の割合は 37.5%（全体の 13.0%）である。

このように her- においては，Origo に視点が置かれる傾向が強い。その際 Origo へ向かう方向は自らへ向かう接近としてを知覚される。近づいてくる対象を知覚する遠近感覚は，即ち距離に認識に直結する。この遠近感覚を hin- にあてはめるならば，Origo に視点が置かれ，そこから離れていく方向が描写されるが，このパターンは hin- においては少なく，またあったとしても目標に重点が置かれることが多く，離れるという遠近感覚は乏しい。以上 her- と hin- の用例を分析した結果，「距離」の典型的なメカニズムとして次のような相互関係が浮かび上がる。即ち Origo は接近を知覚する主体として機能し，逆に「距離」は Origo によって接近する遠近感覚により知覚・認識される。

距離の認識に直結する遠近感覚が描写される傾向が，her- においては強く，hin- においては乏しいのはなぜだろうか。本来「自分への接近」においても「自分からの離脱」においても，

遠近を感じることはできるはずである。しかし近未来において自分が直接関わることになるのは，去りゆく対象ではなく，接近する対象である。それ故に接近する対象の方がより注目されることは容易に推測できる。またこの傾向を裏付ける心理学的実験も存在する。山口・金沢（2008:84）によると，物体の接近を視覚的にパタン化した「拡大運動パタン」に対する防御反応と，接近する物に対するOKN（視運動性眼振）は非常に早期に，既に0-3週齢の乳児において観測されるが，離れる物に対する反応は観測されない。また大人にとっても，拡大・縮小の視覚探索課題のうち，数多くの拡大する運動パタンの中から，離れる移動物に相当する縮小パタンを探す（「縮小探索」）より，縮小する運動パタンの背景から，接近する移動物に相当する拡大する運動パタンを探す（「拡大探索」）の方が容易である（ibid.87-88）。これらの報告は，人にとって，離れる対象より接近する対象の方が遙かに早期に習得され，また容易に認識されることを示している。

接近する方向が重視される背景には，直接自分に関わる物への重視がある。これは乳児の「防御反応」に通じる。接近する対象が本当に危険であれば，正に生命の危機に関わるからである。同時に接近する対象との距離もまた，生存に関わる重要な情報となる。一方「離脱」の方が，習得が遅く，認識されにくいのは，去りゆく対象が一般に生存の危機には関わらないからであろう。

このように距離の認識につながる遠近は，離脱よりも接近という現象を通じて認識されることが，心理学上の実験によっても裏付けられる。以上のことから，心理学的にも「距離」についてOrigoは接近を知覚する主体として機能するといえる

5. まとめと今後の課題

本論文の目的は，「距離」における二項対立の適用により具体的な事例を提示し，「距離」のメカニズムと「距離」におけるOrigoの機能を解明することであった。

まずDiewald（1991）はOrigoを知覚の中心，つまり本論文でいうところの視点をもつOrigoと見なしているが，これはBühler（1934/82）が提唱するOrigoの一部に過ぎない。その「距離」の対立としては，Origoへの遠近という二項のみで，三項のうち残りの一項は，二項の中間として二次的に位置づけられるか，もしくはOrigoからの距離とは別の要素により規定される。また「距離」に直結する遠近は，Origoを起点として指示する方向ではなく，Origoへ接近する方向を知覚することにより，認識される。

以上のことから，「距離」はOrigoからの遠近という二項対立から成り，「距離」についてOrigoは自分へ接近する方向を知覚する視点を持つ知覚主体として機能するといえる。こうしたOrigoの機能は，もとよりDiewald（1991）の知覚の中心としてのOrigoに一致する。

Diewald（1991）のダイクシス過程に照合すると，Hic-Deixis及びher-に見られるOrigoへの

方向はちょうど指示的構成要素の一つである Origo への「再帰的関与」に重なる。そしてもう一つの指示的構成要素であるダイクシス対象への「指示的関与」は Der-Deixis 及び hin- の用法に通じる。この両者の競合関係は，各指示詞によって異なると考えられる。つまり hier と dort のように遠近が際立つ指示詞においては Origo への再帰的関与が強く機能し，逆に da のように遠近を介さずダイクシス対象への指示が重要な役割を果たす指示詞においては，指示的関与の力が強いと推測することができる。

さらに 4.2 で取り扱った hin- の用例においては，視点を持たない Origo が関わるタイプ b とタイプ d の割合が高い。瀧田（2009）では計 211 例（b:121+d:90）で全体数 269 例の 78.5%，瀧田（2010）では計 35 例（b:21+d:14）で全体数 46 例の 76.1% を占める。このような用例では，Origo を担う登場人物の移動や行為がいわば外側から描写される。しかし Origo による行為や移動は，そもそもなぜ観察されうるのだろうか。瀧田（2009）によると，それを行為の意図にある。ある目標を果たすための行為には，予めそれを行う意図が存在し，その行為は終了するまで，その意図にいわば支配されている。つまり意図的な行為においては，行為者は行為を意図することにより，自らの行為をいわば客観視するのである。自らの行為が自らの意図に支配されることは，Bühler（1934/82）において Origo の移動が想定上の指示場で扱われることにも合致する。また哲学においては，デイヴィドソン（1990 :75f.）が「行為は，行為者のなすことが何らかの記述のもので意図的であることを要求するが，このことは，さらにめぐって，行為者のなすことが何らかの記述の下で彼に知られていることをも要求する」（ibid.75）と述べ，さらに「行為者が意図的に行為しながら自分の身体を動かしているとき，自分がその運動をなしていることを知っていると言えるような，その運動についての何らかの記述が存在するが，その意味において，彼は自分がいかに身体を動かしているかを常に知っている」（ibid.76）と説明する。つまり行為は，予めその行為者により知られており，その行為を知る行為者は，まさに行為する行為者を超越し，客体視する。この視点は，行為をする Origo を超越するが故に，Origo から見た遠近感覚からも隔絶されるのである。さらにデイヴィドソン（1990 :75f.）が原初的行為と呼ぶ指差すような身体の一部を動かす身体運動は，hin- のタイプ d の用例によく見られる。

こうした hin- に見られる Origo に関する「視点の離脱」と「客観視」は，Bühler（1934/82）の理論（本論文 2.2 及び 4.1）において，Origo の移動を想定上の指示場でとらえる傾向や，Der-Deixis が遠近を介さないという形で現れる。ある対象を指差す方向は自分から離れる方向であるため，認識しがたい。そしてその意図的な指差し行為において視点は，まさしくその意図とともに客観という遠近から解放された中立の立場をとる。それ故に，ダイクシス対象への遠近は感覚データーとして捉えがたいのである。

おそらくダイクシス現象の根本には，Der-Deixis と Hic-Deixis という二つの指示様式が端を発する現場における言語行動・言語現象と her- と hin- の用法に見られる二つの Origo の機能が

潜んでいると考えられるが，この点については，また今後の課題としたいと思う。

引用文献略号

M= Ende, Michael: Momo, Stuttgart / Wien, 1973.（大島かおり訳『モモ』，岩波書店，1976.）

UG= Ende, Michael: Die unendliche Geschichte, K. Thienemanns Verlag, Stuttgart, 1979.（上田真而子・佐藤真理子訳『はてしない物語』，岩波書店，1982.）

主要参考文献

Bühler, Karl (1934/82): Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache, Fischer, Stuttgart, 1982 (Nachdruck von 1934).

Diewald, Gabriele Maria (1991): Deixis und Textsorten im Deutschen (=Reihe Germanistische Linguistik 118), Niemeyer, Tübingen.

デイビットソン，ドナルド (1990)（服部裕幸, 柴田正良訳）:『行為と出来事』，勁草書房（初版の抄訳）.

Ehrich, Veronika (1982): “Da” and the System of Spatial Deixis in German, in: Weissenborn, J. & Klein, W. (eds), Here and There. Cross-Linguistic Studies on Deixis and Demonstration, Benjamins, Amsterdam/Philadelphia, 43-63.

Ehrich, Veronika (1983): *Da* im System der lokalen Demonstrativadverbien des Deutschen, in : Zeitschrift für Sprachwissenschaft 2, 197-219.

Herbermann, Clemens-Peter (1988): Modi Referentiae. Studien zum sprachlichen Bezug zur Wirklichkeit, Winter, Heidelberg.

堀口和吉（1978/92）:「指示語の表現性」，『日本語・日本文化』8，大阪外国語大学，1978，33-44. In: 金水敏・田窪行則（編）『指示詞』，ひつじ書房，1992，74-90.

金水敏（2001）:「指示詞」，中村明（編）『現代日本語必携』（別冊國文學2000･11改装版），學燈社，2001，160-163.

金水敏・木村英樹・田窪行則（1989）：寺村秀雄（編）『日本語文法　セルフマスターシリーズ4　指示詞』，くろしお出版.

Klein, Wolfgang (1978): Wo ist hier? Präliminarien zu einer Untersucheng der lokalen Deixis, in: Linguistische Berichte H.58, 18-40.

Langacker, Ronald W. (1985): Observations and speculations on subjectivity, in: Iconicity in Syntax, 109-150.

三上章（1970/92）:「コソアド抄」『文法小論集』，くろしお出版，1970. In: 金水敏・田窪行則（編）『指示詞』，ひつじ書房，1992，35-37.

宮崎清孝・上野直樹（1985）：『視点（＝認知科学選書１）』，東京大学出版会.

西郷竹彦（1975）:『視点・形象・構造（＝西郷竹彦文芸教育著作集17, 文芸学講座１）』, 明治図書.

阪田雪子（1971）:「指示語『コ・ソ・ア』の機能について」,『東京外国語大学論集』21, 1971, 125-138.

佐久間鼎（1983）:『現代日本語の表現と語法』, くろしお出版, 1983.

柴田武（編）（1980）:『言語の構造（＝講座言語・第一巻）』, 大修館書店.

瀧田恵巳（2005）:「ダイクシス体系におけるドイツ語指示詞の位置づけと分類について―Diewald（1991）によるherとhin及びその二重不変化詞の分類を例に―」,『言語文化共同研究プロジェクト2004：言語における時空を巡ってⅢ』, 大阪大学大学院言語文化研究科, 21-30.

瀧田恵巳（2009）:「ダイクシス的方向とOrigo　―想定上のダイクシスにおけるher-とhin-の空間的用法に関する一分析―」,『言語文化研究３５号』, 大阪大学大学院言語文化研究科, 73-94.

瀧田恵巳（2010）:「SteppenwolfにおけるOrigoの分析」,『言語文化共同研究プロジェクト2009・言語における時空を巡ってⅧ』, 大阪大学大学院言語文化研究科, 41-50.

山口真美・金沢創（2008）:『赤ちゃんの視覚と心の発達』, 東京大学出版会.

渡辺伸治（2009）:「ダイクシスの定義と下位分類」,『言語文化研究35号』, 大阪大学大学院言語文化研究科, 161-178.